「日々の理科」（第 2725 号） 2021,12,30

「屋上のタンク塔から地球影を撮影する(3)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中　千尋　Chihiro Tanaka

校舎屋上のタンク塔からの地球影撮影には「副産物」があった。遠くの山の「再発見」である。

「再発見」した山並みは、奥多摩から奥秩父にかけての連嶺のようだ。見えた方位や山容から判断すると、雲取山から奥秩父にかけての山脈の一部で、恐らく「木賊山」（とくさやま）と「芋の木ドッケ」と思われる。残念ながら、雲取山や富士山は見えなかった。

地球影は、日の出直前と日没直後の、それぞれ 20 分程度しか観察できない。明け方の地球影の場合、特に日の出 15 分前ぐらいが一番美しい。地平線付近に青紫色の「地球影」、その上に薄桃色の「ヴィーナス・バンド」、その上にまだ明けきらぬ空の青が広がり、それらがグラデーションになっている。あらゆる空の色の中でも、最も美しい一瞬だと思う。

この日に私が屋上のタンク塔で観察していたのは、わずか 10 分ほどだった。その間に、高層ビルの隙間に見えていた地球影は、少しずつ沈んでいくのが、肉眼でも実感できた。やがて、背が高く、東の地平線をよく眺められるサンシャイン 60 の最上階に、朝日が射し始めた。これもすばらしい一瞬である。

明け方の地球影は、満月と同時に沈むこともある。実際には、満月の日周運動よりも、地球影が沈むほうが速いように見える。この日は満月を少し過ぎた日だったので、もともと月のほうが少し遅れていた。それでも、地球影やヴィーナス・バンドの上に月が懸かっていたので、構図的には美しい写真になった。次回の満月の日には、「地球影と一緒に沈む満月」を撮影してみたい。